

学 位 論 文 要 旨

氏 名 石原みちる

題 目 スクールカウンセリングにおける
教師に対するコンサルテーション実践モデルの作成に関する研究

学位論文要旨

序章では、はじめにスクールカウンセラー (School-counselor ; 以下SC) コンサルテーション (「教育の専門家である教師が、その仕事上の必要性から心理臨床の専門家であるSCと行う相談」) に注目する意義として、児童生徒・保護者への間接的支援として重要性、教師の対応力向上が期待できること、「チームとしての学校」を踏まえSCがさらなる展開の時にあることを述べた。幅広い学校コンサルテーションの中でも、SCコンサルテーションについての課題を指摘し、本研究の目的を、第1にSC導入以来我が国で実践されてきたSCコンサルテーションの特徴と全体像を明らかにすること、第2に、SCと教師の双方の視点による「SCコンサルテーション実践モデル」(以下、実践モデル)の作成を試み、初心SCに対するSCコンサルテーションの研修モデルを提言することとした。

第1章第1節では、SCコンサルテーション研究の研究手法、理論的背景、対象となる課題、枠組みを明らかにし、その特徴と課題、今後の方向性について考察することを目的とした。文献研究により、研究は事例・実践研究が多く、事例研究の分析からは、問題状況が多岐に渡ること、明確な契約の枠組みを持たず柔軟な形で継続すること、担任だけでなくコンサルティ以外への関与が並行することが明らかになった。それらの積極的意味を明らかにし、また教師視点の研究を行うことが必要と考えられた。第2節は、事例研究におけるSCコンサルテーションの類型化を試み、SCコンサルテーションの全体的状況を把握することを目的とした。8類型に分けたところ、SCが子ども等に直接関与しつつ、担任等の対応について柔軟な枠組みでコンサルテーションを行う【A: ケース直接関与・柔軟タイプ】が最も多かった。

第2章は、SC視点でのSCコンサルテーションのプロセスを明らかにし、学校コンサルテーションと比較しつつ、その特徴と課題について考察することを目的とした。SCコンサルテーションの過程が述べられている事例研究(29事例)を、KJ法に準じた方法で分析した。その結果、ほぼすべてに共通する流れとして、何らかのSCの視点を提供し、必要に応じて情緒的支援を行い、柔軟な枠組みで事例の展開を継続的に抱えていくというプロセスが明らかになった。学校コンサルテーションのプロセスと異なり、関係づくりはコンサルテーション開始の前に行われている可能性、開始時の契約と対応への評価は必ずしも明確でないことが示唆された。コンサルティ以外への関与として、子ども及び保護者への直接支援、さらにSCから他の教師への積極的働きかけなどの同時並行的支援が明らかになり、日本のSCコンサルテーションの特徴と考えられた。

第3章では、教師の視点から、子ども・保護者に関する課題で困った教師が、SCコンサルテーションを利用して現在の課題及び将来の同様の課題への対応力を向上させた時、SCとの間でどのような相互作用が経験されたかについて明らかにすることを目的とした。中学校教師12名に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析した。SC視点を使って教師が自分を取り戻し、安心して主体的に対応を試行できるようになるということが中心的なプロセスとして明らかになった。SC側の留意点として、①開始の前提となる教師との信頼関係、②SC視点が教師の腑に落ちること、③教師がSCの提案を取捨選択できる関係、④継続的に状況共有し共通理解を深めること、⑤教師の後ろ盾となること等8点が考察された。

第4章では、SC実践場面に則した実践モデルの作成と、実践モデルを利用した初心SCへのSCコンサルテーション研修モデルの提言を目的とした。初心SC8名を研究協力者とし、実践モデルを用いて講義及びグループスーパーヴィジョン(GrSV)形式の研修を行った。質問紙と面接調査の分析から、初心SCにとっての実践モデルの有用性として、①コンサルテーションの基本的な流れの理解促進、②自身の活動を振り返り既にできている部分と次への課題の整理、③コンサルテーションの各段階でSCが具体的に取り組む行動の情報源という3点が明らかになった。結果を踏まえて実践モデルを修正し、実践モデルを利用した継続的なGrSV形式の研修を初心SCの研修モデルとして提案した。

終章では統合的考察として柔軟な枠組み、継続的関与、関係性及び同時並行的支援の4点について、その意義と実践モデルとの関わりを考察した。さらにそれらを統括し、SCの内部性と外部性、「柔軟な対応」の視点で考察した。方法上の限界として、実践モデル作成と研修についてはSCの立場での評価に留まった点等が挙げられた。今後、実践モデルと研修モデルの更なる改善、GrSV以外の形態での研修の検討等が必要と考えられた。最後に、今後の「チームとしての学校」という観点より、外部性と対等な関係の維持、また、日本人の役割関係のあり方の認識等が必要と考察した。

本研究の今後の方向性として、初心SCに役立つ実践モデル、研修モデルの検証と改善、大学院の教育段階での実践モデルの利用が考えられた。今後心理臨床経験自体が少ないSCが、学校で活動する力を得られるように、その教育と研修の形を研究していきたい。